

アユ資源生態研究

(予算区分 県単独 研究期間 平成14～17年度)

担当：水産試験場浜名湖分場

【研究の背景とねらい】

- ・アユは静岡県内の河川における最重要魚種となっており、資源量維持のための種苗放流も内水面漁協によって盛んに行われています。しかし、アユ釣りの好不漁は稚魚の天然遡上の多少による影響が大きく、年によっては著しい不漁となる場合もあり、アユ資源の安定化が望まれています。
- ・これまで、稚魚が冬期に海域で生活する間に大きな減耗があると考えられてきました。そこで、不明な点の多い、ふ化から遡上までの仔稚魚期を中心に、河川及び沿岸域の資源生態、生息環境等を調査し、アユ資源の再生産機構解明を目指しました。

【研究成果】

- ・都田川を流下したアユ仔稚魚は、平成15年度には10月下旬の時点で全長15mm前後に成長し浜名湖南部にまで分布を拡大していましたが、16年度には15年度よりも遅く11月中旬になって同サイズの稚魚が湖南部で確認されました。このことから、都田川河口域から湖南部へのアユ仔魚の分散状況に早い遅いの違いがあることが分かりました。
- ・浜名湖の水温が低い年（都田川河口域の水温と浜名湖の水温との差が小さい年）には、アユ仔稚魚の湖南部への分散が早くなる可能性があることが分かりました。湖南部への分散状況が遅いと養殖用アユ種苗の採捕量が少ないとみられることから、分散状況に影響を与える水温和アユ仔稚魚の減耗要因の一つと推察されました。

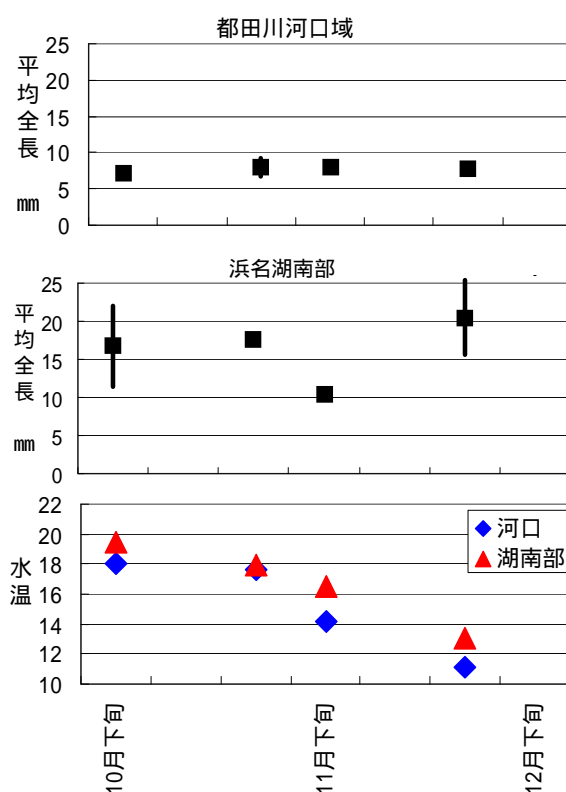


図 都田川を流下したアユ仔稚魚の分散状況（上・中図）と水温（下図）

(図解説) 浜名湖南部へのアユ仔稚魚の分散が早かった例(平成15年)。河口域と湖南部の水温差は小さかった。

【研究成果の普及方法】

- ・得られた成果は、都田川を中心としたアユ資源の増殖対策や浜名湖の養殖用稚アユ採捕業者への指導に活かすことができます。また、全国湖沼河川養殖研究会アユ資源研究部会で結果を発表し、全国的に未解明な仔稚魚期の減耗要因に関する研究の基礎資料として提供しました。

(作成 平成18年4月)